

「保育と教育のカリキュラム論」の授業における実践的演習の在り方

佐々木 利子¹⁾ 有馬 則子²⁾

Practical Activities in Curriculum Theory in Early Childhood Education and Care classes

SASAKI Toshiko¹⁾ ARIMA Noriko²⁾

要約

この研究ノートは、「保育と教育のカリキュラム論」の授業において、指導計画の立案と保育の実際をどのように繋げていくかを、実践的演習を通して考察したものである。実践的演習では「紙コップを使ったけん玉づくり」を題材とし、対象年齢・時期に応じた多様な保育の展開を紹介しながら、製作・遊びの実際を体験した。それにより、保育者の視点と子どもを感じ方の両面から振り返りを行い、保育者が行う援助の意図や配慮等にも気付いていくことができた。

なお、この授業は保育学科の研究授業として実施し、学科教員からの意見をもとに、より多面的な視点で考察を行った。

Abstract

This research paper examines how to bridge the gap between creating lesson plans and actual childcare practices through practical exercises in the class, Curriculum Theory in Early Childhood Education and Care. In the practical exercise, the topic of making *kendama* using paper cups was used to allow students to engage in hands-on activities and play. At the same time, the various childcare processes based on children's ages and developmental stages were explained. By doing so, it was possible for students to reflect on both the childcare worker's perspective and the children's experiences, helping them become more aware of the intentions and considerations behind the support provided by childcare workers. This class was conducted as a research class in the Department of Early Childhood Education and Care and was examined from a more multifaceted perspective based on the opinions of faculty members from the department.

キーワード 具体的実践による保育指導

Keywords : childcare instruction, hands-on activities

受理年月日 : 2024 年 11 月 29 日

^{1) 2)} 高松短期大学保育学科 講師

1 はじめに

筆者らが本学で担当している2年次3セメスター開講の「保育と教育のカリキュラム論」(以下、カリキュラム論)シラバスには、「この授業では、各幼稚園等において編成される教育・保育のカリキュラムについて、その意義や編成の方法を理解すると共に、実態に応じてカリキュラム・マネジメントしながら豊かな保育実践が行えるよう学んでいきます」と授業内容の説明を記載している。

各幼稚園・こども園・保育園においては、園目標を踏まえての教育・保育課程が作成され、骨子となる年間計画からより具体的な月案・週案・日々の保育指導案が作成されている。このような保育の指導計画の流れを知ると共に、カリキュラム・マネジメントとして計画の見直しを行っていくこと等を授業内容としているが、現場での継続的な保育経験がない学生にとっては、保育実践とのつながりをつかみにくいのが現状といえよう。またカリキュラム論では座学形式で理論を学ぶことが中心となっているため、保育の実際を具体的にイメージしていくことの難しさが学生の様子から見られている。

そこで、前期教育実習を終えた時期に、保育指導案をどのように実際の指導に生かすのかを、模擬保育の形式で体験する授業内容をカリキュラム論の授業計画に含め、実践することとした。そして、保育者としての関わり、環境構成や教材の捉え方等の具体を伝えることで、より実践的に理解することを授業目的とした。また、子ども目線、保育者目線で活動を捉えてみることで、ねらいや発達との関連を考えながら視点を広げていくことができればと考えた。

なお、この授業は保育学科の研究授業として実施し、授業後の検討会では学科教員からの意見をもとに、より多面的な視点で考察を行った。

2 授業構成について

カリキュラム論の授業では、「教育・保育のカリキュラムの基礎的概念」「幼稚園教育要領・保育所保育指針等の内容確認」の講義を実施した後、5月中旬から下旬にかけて行われる教育実習での経験も生かしながら、「保育のねらい・内容・内容の取扱いの具体的理解」「子どもの発達特性や発達過程を指導計画に生かす方法の理解」等について指導〔資料1 保育と教育のカリキュラム論 シラバス〕を行っている。

今回の授業は、この「子どもの発達特性や発達過程を指導計画に生かす方法の理解」に位置づくものである。授業の展開は〔資料2 研究授業指導案〕に基づいて実施した。

なお、研究授業は令和5年6月20日、保育学科2年生を対象に実施し、同日に学科教員による検討会も実施した。

2.1 遊びの背景について

今回実施した「けん玉づくり」は、多くの保育施設において保育活動として実践されているものである。例えば、秋の活動で近くの神社等でどんぐりやまつぼっくりを拾ってきた時、それらを使った製作遊びが展開される場面が見られる。その一つとして、空き容器や紙コッ

プ等とマツボックリを使ったけん玉づくりをすることがある。また、5歳児が小学1年生との交流活動において秋の自然物を使った製作遊びをすることもあり、そうした活動の発展として5歳児が3歳児や4歳児にけん玉遊びを伝えていく姿も見られたりする。お正月遊びや昔遊びとしてコマ回しや凧揚げ、羽根つき、けん玉等をすることもあるため、多くの学生がこの先、保育者として経験していくことが予想される遊びの題材と考えられる。

けん玉自体は3～5歳児のいずれにおいても取り組む遊びであるが、遊びの内容や発展の多様性を考え、今回は5歳児での10月頃の遊びとして実施した。

2.2 遊びの展開について

学生が実習等で保育指導案を作成し研究保育を行う場合、どうしても学級全体での一斉活動としての取り組みとなる。しかしながら、実際の保育においては、子どもたちが思いに沿った遊びの中で自分のやりたい遊びに取り組んでいくことと、子どもたちが個々に取り組んでいる遊びを保育者が学級に広め全体的な活動に繋げていくことは、その時の遊びの流れによって、多様な組み合わせとなっている。そうした遊びの柔軟性を伝えつつ、実習での保育援助の参考となることも意図して一斉活動の中での遊びの展開を考えることとした。

2.3 授業の実際について

この節の各項目では、資料2 研究授業指導案の「活動内容」の具体的内容及び意図を説明していく。そのため、資料2 研究授業指導案と並行して見ることで、授業の実際がわかりやすくなるように構成している。

2.3.1 教育要領等の表現活動における「ねらいと内容」を確認する

今回の活動は製作遊びが主活動となるため、ここでの援助のポイントは領域「表現」における「ねらいと内容」について確認すると共に、他の領域との関連性についても、これまでの授業内容に重ねながら気付かせていくこととした。

具体的には、幼稚園教育要領解説書等の「ねらいと内容」を見ながら、どのねらいが5歳児の10月頃の発達の姿と重なるか、またけん玉の製作や遊びの活動内容から、どの内容が該当するかについて説明を行った。説明内容としては、「表現」領域のねらい「(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」、内容の「(5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ」「(7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。」について、5歳児であればこういった姿として見られるかを伝えた。それと共に、例えばけん玉を作る材料として様々な空き容器を用意することで、子どもたちが様々な試したり工夫したりして取り組む様子には「環境」領域のねらいや内容に書かれてあるような姿が含まれること等、他の領域のねらいや内容も重なっていること、つまり遊びは総合的に展開されていることにも触れた。

2.3.2 活動の展開例を示す

ここでは、学生はこれまでの経験上、思いに沿って子どもたちが自由に遊びを展開する活動よりは、全員で一斉に取り組む学級活動としての展開を考えがちなので、実際の遊びにおける展開の多様性について例示し、遊びの進め方を柔軟に考えていけるようにすることをポイントとして説明を行う。実際の遊びの様子としては、登園後、思いに沿った遊びの場で子どもたちがしていたけん玉づくりをその後の学級での集まりの時に紹介し、そこで刺激を受けた子どもたちがその後の遊びの中でそれぞれに取り組んでいく場合がある。しかし、他にも、降園前の遊びの振り返りをする中で、けん玉づくりをした子どもが紹介し、それが翌日の活動に繋がっていく場合等、様々な展開が考えられる。そうした遊びの様子を紹介した後、今回の活動展開を示した。保育の流れは、保育者が製作コーナーの材料紹介等からけん玉づくりへの興味を引き出し、やってみようとする子どもたちの意欲を受けながら、学級活動としてみんなでけん玉製作を行うというものである。

2.3.3 製作活動の実際を体験する

遊びの題材「けん玉を作ってみよう」

ここでは、実習での研究保育等を考えていく際の参考となるよう、けん玉づくりを学級活動の場として展開する。そして、保育者主導の活動の中でも、子どもの意欲を引き出していくための関わり方について学生が気付けるように指導を行うこととした。それと共に、保育展開に合わせてどのような材料や環境にするかを考える等、教材研究の必要性も具体例をあげて伝えていくようにした。より細かな活動内容とそこでの留意点等は以下のとおりである。

○遊びへの導入方法

製作材料置き場を再現し、一例として「この間、小学校に行ってけん玉づくりしたね。その時はペットボトルを使ったけど、ここにある材料でも作れるんじゃないかな?」と呼びかけ、そこにある様々な空き容器を使いながら次々に試していく方法を紹介する。学生が興味を示した容器で授業担当教員がけん玉を作ってやって見せることを繰り返していくことで、「『やってみたい』という意欲が引き出される子どもの気持ち」を実体験できるようにした。

○作り方の説明を聞く

作り方の説明としては、①最初に一通り行う、②作りながら、少しずつ次の作業を説明していく、③最初に説明した後、作りながら再度説明していく、等の方法があるが、活動内容や年齢によってどの方法が望ましいかを考えていくのが一般的といえよう。今回は③の方法を用い、最初に製作活動の流れとして説明し、後は作業をしながら説明していくこととした。

○材料を配る

材料の配り方も、その時の活動時間や活動での重点の置き方、年齢や発達に応じて、様々な方法が選択される。例えば材料の選択も、子どもたちに自分たちの経験としてやらせたいと保育者が願う場合は、そのための時間を十分確保する。しかし、その分製作のための時間は短くなるため、1回の活動時間を長めに設定するか、何回かに分けて製作活動を実施する

といった工夫が必要となる。今回は限られた時間の中で学生に模擬保育的体験をさせると同時に、保育者としての様々な援助等についても伝えていくため、材料は予め個別に分けた状態で準備し、それを配付することとした。

○玉づくりをする

秋の製作遊びとしてはドングリやマツボックリ等の自然物を使うことが多いが、この授業は6月の実施であったため、紙を使って玉づくりをする。

ここでは、教材研究をどのようにしていくかを伝えるため、使用する紙の大きさによる違い、丸め方(丸める時の声のかけ方による)の違い、玉に付ける紐の材質による違い等、授業担当教員が事前にいくつか試してみたものを実際に見せながら、今回の材料選択に至る経緯が分かるようにした。また、紐の先を玉結びにしてテープで止めた時の引っ掛かりを作る方法を知らせる等、保育者として知っておいてほしい保育技術のコツも併せて伝えた。

○カップを選んでけん玉を完成させる

製作活動においては、全員が同じ材料を使うことによって製作体験を共通のものにしたり、作り方の一斉指導を円滑に進められるようにしたりすることがよくある。折り紙の製作等は、この一例といえるだろう。

しかしながら、子どもたちの創造性を引き出していくことや、主体的に取り組むことを大事にしたいと考え、材料の準備の段階から選択できるような環境構成をすることが望ましい。今回の授業でも最初に製作コーナーの環境を生かした遊びの導入を行っており、共通材料として紙コップを全員に渡してはいるが、空き容器で作っても構わないこと、1個目を紙コップで作り、早くできたら2個目は空き容器で作ってみてもいいこと等、選択の幅があることを示した。

作業は、紙コップの底にけん玉のひもを外れないように丁寧に付けるだけなので、出来た人から、一度けん玉をしてみるように声を掛ける。これは、授業担当教員が、かつて保育現場で遊べるおもちゃの製作をした時に、製作途中でも試してみることで作業の結果を確認し、次の行程への意欲が湧く子どもの姿がよく見られていたことによるものである。製作を始めると、保育者は作ることに意識が向きがちであるが、子どもたちの心の動きは一樣でなく、作ることや装飾することに気持ちが向く子どももいれば、「これでどうなるかな」と、試してみたい気持ちが高まる子どもも見られる。そうした子どもの気持ちの在り様にも意識を向けながら作業の進み具合を見ていくことが保育者には求められる。

○完成を確認し模様を付ける

今回は限られた時間の中での製作であったため、ペンでの色・模様付けと様々な色柄のマスキングテープやシールを使った飾り付けとした。このうち、シールは模様付けの始まる段階で教員が用意したが、室内の何ヵ所かに分けておくことで混雑を避け、様々なシールの中から自分なりに気に入ったものをゆっくりと選べるようにした。

シールを使った飾り付けには学生ならではの工夫が見られた。例えば丸型シールをさらに切ることによっていろいろな形を組み合わせられるようにしたり、テープやペンでの模様と組み合わせで独自の工夫をしたりしているものが多く見られた。ここで、作品のいくつかを紹介

介した。人数や状況によっては全員の製作物の紹介をしたりもするが、保育者がそれぞれの作品の良さを具体的に認め、それを子どもにフィードバックしていくのは、子どもが満足感を得、自己肯定感を培うために重要な行為だと考えている。

しかしながら、学生の行う大学内での模擬保育や実習での研究保育等ではこの部分が行われていないことが多く、子どもたちはこの製作がどのような意味をもつのだろうかと感じることがある。とはいえ、学生にとってはイメージしにくい部分でもあるため、ここで振り返りの実際を見せることで、活動の進め方の一例として受け止めてもらえたらと考えるところである。

2.3.4 できたけん玉で遊ぶ

ここでは、集団での様々な遊び方を体験する。今回は、一斉にけん玉をしてカップに入ったら座っていく方法(できなかった人が最後まで残る)と、カップに入らなかったら座っていく方法(できた人が最後まで残る)をやってみた。その中で、どちらも最後まで残った人にどのように声をかけていくか、周りの子どもたちをどのように巻き込んでいくかが重要であることを伝える。例えば、最後まで入らなかった人に対し「誰よりもよく頑張った。あきらめないでチャレンジできたね」と、その姿勢をしっかりと認め、そこを学級全体にも感じさせていくことは、子どもたちが互いの良さを認め合ったり、互いに支え合っていこうとする学級集団づくりに繋がったりする。今回も、子どもがどのような気持ちや考えで活動に参加しているかを、将来、保育者として自分なりに意識しながら保育を進めていくように働きかけたところである。

また、子どもたちがその遊びを楽しめるようにしていくと共に、その時の保育者の関わりが遊びを通して五領域に示される様々なねらいの達成に向けた取組みにもなることも再度説明し、保育の多様性に気付けるようにしていった。

2.3.5 遊びの振り返りをする

作品完成時の振り返りでも述べたが、実習の研究保育等においては、この振り返りが不十分なまま活動が終わっていることが多く、子どもたちが遊びの充実感や満足感を十分に意識するに至っていないと感じている。ここでは、遊んでみての子どもたちの思いを丁寧に受け止めながらプラスの視点で感じていけるようにしつつ、これからの遊びについても子どもたちが主体的に取り組めるような働きかけを行う。それにより、学生が苦手とする遊びの締めくくりについても、今後にどうつなげていくかの一つの例として示した。

2.3.6 体験活動についてのまとめを行う

実践的演習の流れ全体の振り返りを行い、「導入・展開・まとめ」のそれぞれについて、自分が保育者として保育を行う時には、どのようなことに留意していくのかを明確にしていくように働きかけた。なお、一例としての保育活動であることを再度伝え、参考としつつも発達段階や興味・関心に応じて柔軟に自分なりに考えていくように促した。

また、カリキュラム論の授業における実践的演習として実施しているため、長期・短期の指導計画等との関連と、それを日々の保育に繋げる時にねらい等をどう意識化して取り組むかについても、再度確認するようにした。

3 授業後の学生の振り返りから

授業の終わりに、振り返りシートに学生の受け止めや今後の取り組みについて記入をさせた。それにより、この活動を通して子どもたちが経験しているであろう内容や、保育者が今回の遊びをきっかけにどのように展開していこうと考えているか、またその中で大切にしたいこと等について、学生が立ち止まり考える機会にした。その後、学習シートの記入事項を集計し、分析した。そのまとめは次のとおりである。なお、振り返りシート回収数は47名分であり、各設問の回答は複数回答可としている。

<学生の振り返りシートより>

問1～3についてはすべて自由記述であり、似通った内容は同一箇所にもまとめている。

問1 保育活動を体験してみて、子どもたちはこの遊びを通してどんな経験ができると考えましたか。

項目	回答数	内容	小計
思考力 工夫	4 9	・自分で考え試行錯誤しながら工夫する	2 9
		・豊かな発想と自分らしさの発揮	1 1
		・自分の思ったことや考えを伝え表現する	9
人間関係 協同性 達成感	6 0	・友達とのコミュニケーション、良さの認め合い	2 4
		・完成させる喜びや達成感を味わう	1 2
		・譲り合い、助け合い、多くのアイディアの発見	1 1
		・友達と勝負する楽しさと挑戦	6
		・諦めない心と忍耐力、集中力	4
		・友達と共通の目標に向かって行動する	3
その他	1 4	・色々な素材に触れ特性に気付き大切に扱う	1 0
		・成功させるための体の使い方（全体・指先等）	4

(考察)

- この授業の中で「保育のねらい」として抑えるべき点（試行錯誤しながら工夫すること、達成感・コミュニケーション力等）は、概ね理解できている。
- 試行錯誤する中での工夫や友達との関係性・達成感等は、今回の授業体験を通して学生自身の心に強く残ったことが、言葉として表現されたものであろうと思われる。子ども同様に、学生にとっても実体験・感動体験等が重要であると思われる。

問2 これからのけん玉遊びの展開として、あなたならどんなことをやってみたいですか。
また、その中で大事にしたいことは何ですか。

〈けん玉遊びの今後の展開〉

項目	回答数	内容（遊びの展開）	小計
本授業内で製作したけん玉を使う場合	2 3	・けん玉大会、けん玉リレー、競争等	1 6
		・作ったけん玉を友達と交換して遊ぶ	7
新たにけん玉を製作する場合	1 4	・様々な素材（紙や紐）を使って試してみる	9
		・紙コップ等の容器を別の物に変えて作る	5

〈今後、遊びを展開するうえで大事にしたいこと〉

項目	回答数	内容（大事にしたいこと）	小計
環境構成	1 2	・作りたいものが作れるよう材料の置き場所と補充、時間配分、広い場所の確保	1 2
人間関係 向上心 協同性	3 3	・コミュニケーション力（応援する・認め合う等）	1 1
		・自分で考えたり工夫したりする	7
		・子どもたちの興味や好奇心、挑戦する気持ち	6
		・クラス全員で楽しむ、共通の達成感	4
		・子どもの疑問を子ども同士で解決していく経験	3
		・チームのために頑張る心、自信	2

（考察）

- 本授業内で製作した物を使って、ゲーム的な要素を取り入れた「けん玉大会」「けん玉リレー」等は、5歳児を対象とした遊びの展開としては、思い浮かびやすい内容であったと思われる。しかし、今回の遊びを一つの例やヒントとして教材研究を行い、学生がイメージを膨らませ、さらに深く子どもと共に試したり工夫したりするということまでには至らなかったようである。
- 環境構成や人間関係（コミュニケーション力を含む）・協働性等、本授業におけるねらいの中でも、授業者が特に意識してほしいと考えていた内容は、概ね学生自身にも考えられていることが分かる。しかし、ねらいを達成するための具体的なイメージや取り組みについては、言葉のみが先行しているようなところが多々見受けられる。今後、自主的、積極的に遊びについての研究をしてほしいものである。

問3 保育活動の体験から、教材研究として何を大事にしていこうと思いましたか。

項目	回答数	内容	小計
環境構成	3 1	・道具の素材や材料の個数を工夫する	1 8
		・安全面や作る物、用途に沿った材料を使う	6
		・材料や素材の選択肢を増やす	4
		・子どもにとって行いやすい環境を整えていく	2
		・細かい部分や目立たないことでも、子どもが作業しやすいよう工夫する	1

保育者の 配慮事項	3 2	・子どもたちの「やってみたい」という気持ちを引き出し、イメージを広げながら様々な表現を楽しむ	1 2
		・テープや糸の種類等を何回もやってみて事前準備をし、子どもたちに考えてほしい部分に時間を掛けられるよう試行錯誤する	9
		・年齢に合っているかどうか、発達段階を考慮する	7
		・保育者の手助けの頻度	4

(考察)

- 学生は、子どもたちの発達に応じた材料等を考えたり、素材の特性を知ることの必要性には気付いたりしているが、どのような物を素材として考えるかという思考の範囲が狭いと思われる。その理由の一つとして、日常生活における経験不足が考えられる。近年、様々な道具や教材が便利で簡単に入手できる傾向があり、例えば紙花を作る際にも、製作キットで販売されていたり、既に完成品として市販されていたりすることも多い。このように、自分たちで考えたり工夫したりしなくてもいいような状況下にあることも一因ではないだろうか。今後、様々な経験を増やし、柔軟な発想ができるような授業内容が必要とされているかもしれない。

4 検討会での教員の意見から

検討会では、「授業の積極的に評価できる点」と「授業の改善に関わる点」の2つの視点から討議が行われた。それぞれの視点について出された意見集約(口杵)と、それに対する授業者の意図説明は以下のとおりである。

4.1 授業の積極的に評価できる点

4.1.1 教育内容

(全体的内容)

表現・製作活動をどのように導入し展開・まとめまで進めるかについて、具体的にポイントを押さえた授業になっていて、学生は様々な学びができたのではないかと。また、けん玉の製作プロセスや製作後の活動を多様な視点から眺め、それぞれについて考察し、見解を加えていく方法が網羅的に行われており、分かりやすくまとまっていた。

保育指導においてほとんどの学生が導入部分とまとめ部分に苦手意識を抱いている。導入部分での、子どもたちが活動に意欲をもてるような意識付けや、まとめの部分での、その後の遊びに続いていくような働きかけを、どのように行っていくことが遊び全体としての充実となるかを、学生がそれぞれに感じ学ぶ場となっていたと思われる。

(五領域との関連)

教育要領等の表現活動における「ねらいと内容」について、また他の領域の関連性について確認され、表現領域だけでなく他の領域にも大いに関係があるということを再確認

する機会となっていた。

カリキュラム論の授業計画には、「遊びにおける五領域の関連性」についての講義が含まれている。この講義において、一つの遊びにおいても様々な領域が関連し合っていることや、それぞれの「ねらいと内容」が、遊びが展開する中でどのように押さえられているか等について伝えている。今回の授業の中でもそれらを確認する機会として学生に認識されていたかと思われる。

(教材研究)

教材研究の在り方について、具体的な遊びを通して学ぶことができていた。学生自身が、「この部分どうやって進めたらいいのだろうか」と思ったところを、しっかり教材研究してみたらよいのだということを学んでくれたのではないだろうか。

具体的ところで、ビニールテープの素材としての特徴について詳しく説明していた。また、教材研究の大切さについて、「子どもと一緒にするところ（糸の太さや長さ、玉の大きさ等）」と「子どもが個々で工夫できるところ（器、シール等）」とではいろいろ異なることがよく分かった。どちらも大事で、どういう配分ですか、年齢や興味関心、五領域との関連づけも含め、「けん玉づくり／遊び」の教材研究が充実していると感じた。

授業の一環として研究保育の指導案作成に取り組んでいるが、それと併せて教材研究も課題として実施している。しかしながら、インターネット上の知識等に頼りがちで、自分で作ったり使ったりしてしながら、子どもたちにできる活動かどうか、難しいところはないかといった視点で教材について試行錯誤することはなかなか難しいのが実情である。

今回のように、実際に作りながら細かく説明することで、実感として教材研究の意味を感じたり、教材研究への取り組み方を知ったりできたのではないかと思われる。

(主体性について)

「作ってもらおうと思います」ではなく、やりたい意識を引き出す、素材が目前に出てきた時に作りたいと思わせる提示の仕方や工夫が必要であることの必要性の話と、その実例を提示して紹介していたので、理解しやすかったのではないかと。

また、あくまで子どもの主体性を大切に、子どもの気持ちに寄り添ってということが随所で実感できるものであった。

模擬保育や実習での研究保育等では、実習生が考えた遊びを「～しようと思います」という言い方で子どもに話しかけることが多い。これには、実習生という立場での遠慮のようなものもあるのかもしれないと感じている。しかし、話しかけられる子どもたちにとっては、一方的に課題を告げられるような形になるため、子どもたちが保育者の提案を受けつつも、自ら主体的に取り組めるような伝え方を考えることを意識してほしいと願っている。そのため、この授業に限らず、可能なところで「保育者の意識のもち方や伝え方」として話しているところである。

4.1.2 授業方法

(全体的内容)

これまでの復習（ねらい、五領域）をした上で、それを踏まえた保育実践の流れがとてもスムーズに行われていた。理論だけではなく、学生が自ら製作に取り組むことで、その時その時の子どもの気持ちになれる、そして新しい気づきが得られるという効果があったと思われる。活動の準備にどれほどの時間をかけなければならないかという、教材研究とも言える部分についても学生が実感できたのではないだろうか。実際の体験を通し、さまざまな観点から考察できる良い機会だったと思う。

今回のような保育活動の体験は、学生にとって指導の具体が分かりやすいものであるが、どうしても指導方法の一例を知るという方向に流れがちである。そのため、実際の保育における保育者の意図として、ねらいとの関連付けや五領域とのつながりを随所で伝え、保育者の思いも学生なりに意識しつつ理解を深めることができることを、指導のポイントとしているものである。

(環境構成・準備)

教室の前後に教材や道具が準備され並んでいたが、これは保育の始まりを想定してのことと思うが、それそのものが環境であり、導入となり、早くやってみたいと思うものだった。

保育現場では、保育室の一隅に製作コーナーを設け、様々な材料を置くことで子どもたちが触発され「作ってみたい」「これでなにができるだろう」と様々な意欲をもつことを願っている。そうした環境構成の意味を学生も感じるようになっていたと思うところである。

(授業の進め方)

実際に保育者が幼児に教えているような感覚で授業展開が進められ、どのように作れば良いかを見せるというやり方で学生に教えられていた。その合間に保育者としての考えや心構え等を話されていた。学生にとっては、こういう言い方でやれば良いのだという実例としてよく理解できたと思う。このように、実際の保育者としての活動と、その活動の説明が切り替えられ交互にある点は「生活の一部としての保育」について理解するのにとても良いと感じた。この点は、保育体験活動後の授業の振り返りである「子どもたちの『楽しかった』を掘り下げる（PDCA サイクルを回す）」でも具体的に考え、学習シートにまとめる機会に繋がるものだと思う。

「教える保育者の視点」と「活動を楽しむ子どもの視点」の両方を体験することで、保育を様々な視点から考える経験となっていたかと思われる。特に、「子どもにとってどうか」という視点は子どもたちが目の前にいないだけに捉えにくく、自分の体験から予測することで、少しでも考えるきっかけとなっていればと思うところである。

(その他、具体的内容について)

子どもたちに対して「どんなふうに感じたか？」の質問でも、「楽しかった！」「良かったね！」で終わらせるのではなく、「何が」「どんなところが」「なぜ」というような内容まで引き出せる声かけが必要という話があった。

最近の若者の傾向の一つとして形容詞の語彙が少ないことを感じている。「かわいい」「楽しい」しかない気がするのだが、その影響を受けてか、子どもたちも例外ではなく尋ねても「楽しかった」としか表現しない。そこについてさらに尋ねてみるということを気付かせていたことは大いに共感できることであった。

今回の活動は製作遊びであるため、「表現」領域のねらいと内容を主として取り上げていたが、製作遊びの活動の過程で子どもたちは様々に感じ考えており、そうした気持ちを言葉で表現し伝えようとするのはよく見られる。これは「言葉」領域にも関連するもので、表現する楽しさを味わっていくと共に、自分の様々な思いをそれにふさわしい言葉を見つけ、自分なりに表現しようとする意欲や態度の育ちとなる。ここでは、子どもたちへの問いかけ一つにもそうした奥深さを感じることができるようにと考えた。

片付けについても、持っていくだけの片付けではなく、次に使いやすくするために工夫して片付ける気持ちが必要であるという指導があった。片付けの場面での「次のこと（次の人のこと）を考えて片付ける」は大事なことだと思う。

これは「健康」領域の内容の取扱いにも記載されているが、生活に必要な習慣を身に付けると共に、次第に見通しをもって行動できるようにすることに繋がるものである。

4.1.3 その他

学生たちには「良い保育実践を見る」経験が不足しているのかもしれないと考えている。演習系の授業でも学生同士で模擬保育をすることが基本であるだろうし、実習中は、日々の業務、記録の作成、部分保育の構想・準備等に追われ、実習園の先生の実践を落ち着いた気持ちで見ることができていないのではないかと考えている。そういう意味で、今回のような授業は、学生にとって新鮮でかつ貴重なものであったかもしれない。

学生を子どもと仮定しての保育体験の形であったが、活動の進め方、その中での保育者の動き、保育の基盤となる要領・指針と繋げること等、保育者の意図や技術を知る機会にはなかったのではないかと考える。

4.2 授業の改善にかかわる点

4.2.1 教育内容

今回、5歳児という設定で実施した活動をもとに多くの学生は各年齢の場合を考えていくことができると思うが、機会があれば、乳児や未満児の表現をどう捉えるかについても扱うことができればと思った。乳児や1歳児のつたない表現をどう受け止めて言語化するか、また1～2歳児の言葉をどのようにリズムやメロディーにして共有できるか等について難しさを感じているところである。

今回授業を担当した2名は幼稚園での実務経験が中心であるため、未満児の保育については、数少ない経験や現場で見聞きしてきたことを基に、学生にも伝えている。しかし、本科の学生が初任者として勤務する場合、未満児担当となる割合が高いことから、自らも学び

を深めなくてはと考えているところである。

学生側が今回の 90 分間の授業をどのように感じたのかが気になる。「先生による模擬保育を経験した」と感じたのか、「けん玉製作の指導法を学んだ」「けん玉遊びを経験した」と感じたのか、それとも全く違うふうに感じたのか。いくつかのバリエーションがあったのではないかと推測する。授業担当教員的には、この授業をどのように経験して欲しかったのか、ということも重要であろう。この点は検討の余地があったかもしれないと考える。

授業担当教員としては、模擬保育の形で学生がけん玉製作の指導法を学ぶことと、保育の基本としてのねらいの考え方や、それに基づく援助についても知ることを目的としていた。授業最初の授業目的の紹介で、そのあたりを明確に伝えることで、学生が学ぶ内容を意識して取り組めたかもしれない。

友達と作ったけん玉を交換して遊ばせる、お互いの作品について話し合うというところまで十分な時間確保ができればよかったのではないか。例えば、このけん玉作りが今後どのように発展していくことが予想（期待）できるのかを考えることもできるのではないだろうか。

これまでの現場経験が凝縮された授業だけあって情報量が多かったため、学生によっては捉えきれなかった情報があったように思われる。これまでや今後の内容に繰り返しを含むことで、学生のさらなる成長となることを期待したい。

例えば、「けん玉を作って遊ぶ」という遊びを題材として、保育実施にあたっての指導案作成、けん玉の製作、けん玉を使った遊びとその振り返り、その後の展開といったいくつかの授業内容を構成し、一つのテーマで深く掘り下げるような方法も考えられるのではないかと感じた。

4.2.2 授業方法

学生は実際にけん玉を作る、それを使って遊ぶ、片付けるまでやっていたが、どこまで理解し、説明内容を記録できたかが懸念された。例えば、グループ分けして、実際に保育者・幼児としてけん玉を作らせるグループ、それを参観して、注意すべき点や気が付いたことを記録するグループに分け、その役割を交代してやらせるという方法はどうかとも思った。学生自身が客観的に活動を見ることで気付く部分もあるのではないか。

研究保育のように参観者を設け、その後の話し合いで観察を中心とすることでの気付きが示されることで、指導の在り方についてはより良い方法を考える場となることが推測される。保育の実施者と参観者という二つの役割をどのように分担していくかも考えながら授業構成を考えたいところである。

例えば、「抜けやすいので、たこ糸の端っこを固結びにして、テープはこの位置に貼って・・・」というように、細かくすべての方法・注意点を提示されていたこと等の是非を感じる。限られた時間の中で効率よく学生たちにやって欲しい、注意すべき点を伝えたい

場合にそのようなマニュアルとして教えるやり方になるのは理解できる。しかし、時間に余裕があるのであれば、まずは自分たちで考えさせてやらせてみて、失敗させて、ではどのようにしたらたこ糸が抜けにくくなるのかな？を考えさせる時間があるのが本来の姿ではないかと思った。

学生には、子どもに製作技術を伝えていく場合、これからの遊びの先行経験として基礎技術等を子どもに提示する場合と、子ども自身が困っている場面に寄り添いながら自分で方法を見つけていけるよう援助していく場合があることを伝えている。実際、製作コーナー等で子どもたちが「ものづくり」をしている時には、子どもの主体性に任せていくことを考えながら関わるのがほとんどである。

今回、たこ糸の扱いについて具体的な方法を示したのは、製作に関する技術経験の少ない学生が多く見られることから、保育者としての技術習得の機会になればということも考えてのことであった。こうした配慮をする意味を理解し、自分なりに応用しながら生かしてほしいと願うところである。

授業担当教員が、「保育を行っている保育者」と「授業を進める教員」の役割を切り替えながら進めていたのに対し、学生によっては「保育活動をする子ども」「保育者の立場を学ぶ実習者」「授業として講義を聞く学生」の3役切り替えが難しい学生もいたかもしれないと感じた。

確かに、授業の中で状況に応じ役割の切り替えを行っていったが、学生に特にそのことを伝えていなかったのも、「今はどの立場で語られているのか」があやふやになったかもしれない。その点は、何らかの周知をすることで切り替えていくことも考えてみたい。

授業の中で多数の事例（エピソード）を語っていたように思う。たしかに、これまで授業を見たり聞いたりした経験から言えば、学生は事例を聞くことに対して喜ぶ傾向があると感じている。実際、理論的な話をする際には、具体的な事柄と結びつけずに説明してしまうと空虚で無意味なものになってしまう。なので、具体例やエピソードを志向する学生の姿勢は、適切で健全なものであると思う。

ただ、ここには注意すべき事柄もあると感じている。たとえば学生が授業で事例を聞いて「面白かった」と感じたとしても、単なる余談として面白がっていたり、体系性を欠いた形で理解していたりすると望ましくない。具体例だけが切り取られて印象に残ってしまうと、授業担当教員が伝えたかったことを曲解することも少なくないと思われる。恐らく、授業の中で多数の事例を取り上げているだろうと思われるので、この点、どのように工夫する必要があるか、あるいは、具体例に対する学生の理解についてどのように感じているか、気になるところである。

この授業については、事後に Google Classroom にて、授業の振り返りを提出することを義務付けている。その中で、授業理解がどのようなものであるか、授業中に伝えた事例に対する感想がどうかといったところを把握するようにしている。ほとんどの学生は、事例を通してより理解を深めている様子がうかがわれるが、時として意見にも書かれているように

「面白かった」という部分だけを捉えていると感じる学生も見られる。

次回の授業で、学生の振り返りに対するコメントを伝えながら、必要に応じて修正や追加を行うようにしているが、取り扱う事例の内容を精査していくことと、何が伝えたくてこの事例を取り上げたかが明確に理解できるような伝え方が重要だと感じている。

4.3 授業全体の感想

学生の多くは、①教材研究、②導入、③まとめの3点に対して苦手意識を抱いている、あるいは、誤解をしているように思われる。

このうち、特に①教材研究については、そもそもその必要性や意味を理解していない（「研究」という言葉が理由で敬遠しているのかもしれないし、指導案に書く欄がないから自分が教材研究をしていると思っていないのかもしれない）。そういう取り組みをしている授業もあるかもしれないが、教材研究のレポートのようなものがあっても良いのかもしれない。その上で、教材研究を行う（あるいは、行いやすくする）ためには、少なくとも①時間、②予算、③材料群が必要であると思われる。そして、残念ながら、学生たちの多くには、この3つすべてが欠けてしまっているのかもしれない。ゆつたりと考える時間的余裕、教材準備室のような空間等があると良いのかもしれないと思った。

また、②導入については、練習しようにも、たとえば模擬保育の場合は、保育の対象となる子どもたちが実在していないという限界があることにも気付かされた。この点は、学科全体として取り組むべき大きな課題であると感じた。

③まとめも含め、①②③を集中的に扱う授業内容を充実させることができると良いのかもしれないと考えた。

確かに実習時の研究保育等を見ている、導入やまとめの部分が十分に検討されていない、実際に実習の中でどのようにそこに繋げるかが分からなかったり等、不十分さを感じる場合がよくある。学生として、子どもたちを前にしての実践的な経験を積むには限界があるが、それはどの養成校においても共通の課題と思われる。そのうえで、どのような取り組みをすることがこうした課題に対応することとなるのか、考えていく必要があるのではないだろうか。

また、教材研究についてはカリキュラム論の中でも指導案作成とセットで行わせているが、教材研究用紙の書き方見本として示した事例をなぞるように行う学生が多く見られる。教材研究は行う保育内容によって多様であることを、添削コメントで個別に伝えているが、そこから教材研究に再度取り組む学生がどのくらいいるかは不明である。実習時に担当保育者から指導を受けたことをベースとして、今後に生かしてほしいと願うところである。

5 おわりに

- カリキュラム論の授業では、全体的な指導計画を体系的に学ぶことから日々の保育指導案作成の実験を経験することまで、幅広い内容を取り入れているが、学生にとっては、この授業のように遊びの実験を通して考えるという、これまでの実習体験等も生かした中で

指導計画等との関係性を考えていくことが、分かりやすさに繋がった。

保育の全体的な計画は重要なことと認識されつつも、現場の保育者においてもその内容把握に難しさがあるように感じている。保育現場での生活の全容が分からない学生にとっては、さらに難しいことは、想像に難くない。学生にとって、実感的理解となる方法を模索しつつ、今後の授業構成にも努めたい。

- これまでも、例えば「五領域の関係性」「ねらいと内容の捉え方」等について、様々な事例をもとに具体的にイメージできるように伝えてきているが、事例を言葉として聞くことで、その事例について築き上げるイメージは一人ひとり異なったものとなり得る。そして、教員が思い描いたシーンとは異なるイメージをもつ学生もいると思われる。学生の捉え方は確かに一人一人違って当然であるが、伝えたい要点がずれてしまうことは望ましくないことから、学生の受け止め方や理解状況等を確認しながら授業展開を見直していくことは、常に必要なことだと再認識した。
- 学生は、子どもが経験していることや保育において大事にすること、発達段階や素材の特性を知ること等理論上では理解できていても、具体的なイメージや実際の取り組みには繋がりにくいところがあると思われる。生活様式の変化に伴い、利便性のある物については取り入れながら、一方で知識として得たものを学生自身が試行錯誤を繰り返しながら自分なりに考えたり工夫したりする経験も重要視したい。今後、保育現場において柔軟な発想や対応ができるよう、日常生活の中で様々な経験を積むことが望まれる。
- 授業の構成について、異なる専門分野の教員からの意見をいただくことで、気付かされる点がいくつかあった。「多面的に捉えてみる」ということは、学生にも伝えていることであるが、自身の授業内容についてもこのような機会を生かし、より良い方法について考えていきたいと思う。

参考文献

- 文部科学省編(2018)『幼稚園教育要領解説』フレーベル館。
- 厚生労働省編(2018)『保育所保育指針解説』フレーベル館。
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省編(2018)『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館。

〔資料１〕 保育と教育のカリキュラム論 シラバス

科目ナンバリング： CUI212

授業形態： 講義

科目名： 保育と教育のカリキュラム論

担当教員： 佐々木 利子(SASAKI Toshiko)

【授業の紹介】

幼稚園等では、保育者が子どもたちと楽しそうに遊び、生活が展開されていますが、すべての活動は、教育・保育のカリキュラムに基づいて行われています。この授業では、各幼稚園等において編成される教育・保育のカリキュラムについて、その意義や編成の方法を理解するとともに、実態に応じてカリキュラム・マネジメントしながら豊かな保育実践が行えるよう、学んでいきます。

本授業科目は、幼稚園教諭二種免許状及び保育士資格取得のための必修科目です。

なお、本授業科目では課題の指示や提出にあたり Google Classroom も使用します。

【ディプロマポリシーとの関連】

要件年度	要件所属	ディプロマポリシー
202104 ～202404	保育学科	3. 高度な専門的知識と的確な洞察力や判断力
		4. 多彩な保育活動を創出する基礎技能を基盤とした保育実践力

【学修成果との関連】

要件年度	要件所属	名称
202104 ～202404	保育学科	⑦ 指針・要領の理解
		⑧ 保育に関わる専門的知識の習得
		⑨ 洞察・判断する力
		⑪ 保育を計画する力

【到達目標】

「保育学科のめざす保育者像」に基づき、次の3つを到達目標と設定します。

1. 幼児教育において、教育・保育のカリキュラムが有する役割や機能、並びに意義を、要領・指針等を基に理解することによって、使命感や倫理観を高めることができる。
2. 教育・保育のカリキュラム編成の基本原則、並びに幼稚園等の保育実践に即した教育・保育のカリキュラム編成の方法等、保育を計画するための専門的知識を習得することができる。
3. 園・所の教育・保育カリキュラム全体を、多角的に考えマネジメントすることの意義を理解し、豊かな保育実践の基盤を培うことができる。

【授業計画】

- 1 オリエンテーション、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」とは

- 2 教育・保育カリキュラムの基礎的概念
- 3 幼稚園・保育所・こども園の歴史的変遷の概要及び保育をめぐる環境・現代の保育事情
- 4 幼稚園・保育所・こども園の生活と子ども理解
- 5 教育要領・保育指針等における保育のねらい・内容及び内容の取扱い
- 6 保育の循環と評価の意義
- 7 子どもの発達過程の概要
- 8 子どもの発達特性や発達過程を指導計画に生かす方法の理解(総合的な遊びを通して)
- 9 幼稚園、保育所、こども園における教育・保育カリキュラム(全体的指導)の実際
- 10 幼稚園、保育所、こども園における指導計画(月・週案等)の実際
- 11 教育・保育カリキュラムの編成と展開について
- 12 指導計画の作成と展開について①(月の指導計画)
- 13 指導計画の作成と展開について②(週の指導計画)
- 14 指導計画の作成と展開について③(週案から保育指導案へ)
- 15 幼稚園、保育所、こども園における保育の評価の実際

【成績の評価】

授業に取り組む意欲・関心・態度(20%) 学習シート等の課題の記入や提出(40%) 定期試験(40%) 課題の返却により、個別及び全体での振り返りを行うことでフィードバックする。

【使用テキスト】

- ・教育課程論(神長美津子・津金美智子・河合優子・塩谷香 編著、光生館 2018 年)
- ・保育所保育指針解説(厚生労働省 フレーベル館 2018 年)
- ・幼稚園教育要領解説(文部科学省 フレーベル館 2018 年)
- ・幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説(内閣府・文部科学省・厚生労働省 フレーベル館 2018 年)

【参考文献】

適宜紹介します。

【実務経験】

有り

【実務経験と授業科目の関係性】

この授業は、実務経験のある教員による授業科目です。幼稚園・こども園で、教員・園長として教育・保育のカリキュラムを作成した経験を生かして授業を行います。

【科目等履修生の受入】

無し

〔資料２〕 研究授業指導案 「製作活動における保育の展開について」

本時のねらい：製作活動における導入から活動の展開に至る流れを理解する

時間	活動内容	指導内容及び留意点
10：40	○授業内容の確認をする ・授業の目的及び構成を知る	・実習での研究保育等を視野に入れながら、保育の展開の実際を体験していく場として積極的に取り組むよう促す。
10：42	○教育要領等の表現活動における「ねらいと内容」を確認する ・表現領域について ・他の領域について	・教育要領解説書等を基に、「表現」領域での「ねらいと内容」を確認すると共に、他の領域との関連性についても、これまでの授業内容に重ねながら気付かせていく。
10：47	○活動の展開例を示す ・思いに沿った遊びの場で ・学級活動として	・主に学級活動としての展開を考えがちなので、実際の遊びにおける展開の多様性について例示し、柔軟に考えていけるようにする。
10：55	○製作活動の実際を体験する 「けん玉を作ってみよう」 ・遊びへの導入方法 ・作り方の説明を聞く	・ここでは、実習での研究保育等を考えていく際の参考となるよう学級活動の場として展開する。 ・保育者主導の活動ではなく、子どもの意欲を引き出していくための関わり方について気付けるようにしていく。
11：00	・材料を配る ・玉づくりをする ・カップを選んで完成させる ・完成を確認し模様を付ける	・保育展開に合わせて、どのような材料や環境にするかを考えた教材研究の必要性も具体例をあげて伝えていく。
11：20	○できたけん玉で遊ぶ ・集団での様々な遊び方をする ・友達と交換して遊ぶ ・互いの作品について話し合う	・子どもがどのような気持ちや考えで活動に参加しているかを、自分なりに意識しながら進めていくように働きかける。 ・子どもの交流場面では、「表現」領域に限らず他の領域のねらいとの関連性も説明することで、保育の多様性に気付けるようにする。
11：40	○片付けをする ○遊びの振り返りをする ・自分の感想を伝え合う ・これからの遊びについて	・学生が苦手とする遊びの締めくくりについても、今後にどうつなげていくかの一つの例として示していく。
11：45	○体験活動についてのまとめ ・流れの振り返りを行う ・学習シートに記入をする ・記入内容の発表とまとめ	・「導入・展開・まとめ」のそれぞれについて、今後どのようなことに留意していくのかを明確にしていけるように働きかける。 ・一例としての保育活動であることを再度伝え、参考としつつも発達段階や興味・関心に応じて柔軟に自分なりに考えていくように促す。